

待降節第2主日 B年

第一朗読 イザヤ 40・1-5、9-11
第二朗読 二ペトロ 3・8-14
福音朗読 マルコ 1・1-8

2023.12.10 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日は、このあとに洗礼志願式があり、また、ミサの最後に洗礼を受けられて10年経った方々のささやかなお祝いがございます。そういうことで、わたしたち、ここに集まったみんなも、信仰生活、あるいは信仰をいただくとはどのようなことかを改めて考える機会をいただいたとすることができますと思います。

信仰とは、神様の新しいものの見方をいただくということだと言えると思うんです。今日の福音書では、洗礼者ヨハネ、イエス様の到来を準備するための預言者が荒れ野で悔い改めるように人々に呼び掛けていたということが朗読されました。この「荒れ野」というのは、聖書の中では、悪霊に引きずられる、あるいは神の恵みを見出す、どちらにも転ぶ可能性がある場所です。人間の目から見れば、荒れ野っていうのはなんにも無い、そこでは生きることができないっていうふうに見える。しかし、信仰の目によれば、その荒れ野にも神様の恵みが働いている、あるいは荒れ野だからこそその恵みをよりはっきりと味わうことができ、そしてその荒れ野を通して神と共に生きる、神の国に導かれる、そういう場である。だから、洗礼者ヨハネは、たまたま荒れ野で悔い改めを宣べ伝えていたというよりも、そういうような象徴的な意味を持っている荒れ野において悔い改めを呼び掛けたっていう、ひとつの象徴的な行為であることができます。

信仰を持って見るならば、わたしたちに見えているもののその現状や物事に対する解釈は、神様のものの見方によって変えられて行く、あるいは、少なくとも、自分が感じているようなものの見方だけが真実ではないのだということを絶えず心のどこかに留めておくようになる。それこそが信仰を生きる者の姿勢であると言えます。

今日の第一朗読はイザヤの預言の中から採られました。そして「慰めよ、わたしの民を慰めよ」（イザヤ 40・1）っていう言葉で「神様による慰めの時がやって来たんだ」っていうことを預言者が語る。そういうところが朗読されたんですが、この預言の箇所が念頭に置いている背景になっている出来事というのは、バビロン捕囚が終

わって、バビロニアに連れて行かれていた人たちの子孫がエルサレムやユダの地に
戻って来るっていう、そういう出来事です。バビロン捕囚というのは、旧約聖書の中
の非常に——最もと言ってもいいくらい大きな出来事です。

イスラエルの民の国がバビロニアっていう帝国によって滅ぼされて、都がなくなっ
て、神殿が破壊されて、そして主だった人たちがバビロニアの都のバビロンという町
に連れて行かれたっていう——当時ユダの地には25万人ぐらいの人口があったと
言われていますけども、その中の技術を持った人とか知識人とかを中心に1万5千人
ぐらいがそういうふうにバビロンに連れて行かれたっていうふうに言われてます。何
度かにわたって捕囚というのは起ったわけですけども、バビロニアが次の帝国のペル
シャによって滅ぼされたことを受けて、連れて行かれた人たち——もう世代は変わっ
ていますね——の子どもや孫たちがユダの地に戻って来るっていう、その出来事を念
頭に置いて、イザヤの預言が「慰めよ、わたしの民を慰めよ」と主の言葉を伝えてい
るっていうのが第一朗読なんです。でも、信仰ではない、神様から離れた人間だけの
ものの見方からすれば、それは必ずしも慰めの時や、神の民にとっての喜びの時とい
うわけではないんです。

50年経って、ユダの地はエルサレムも含めて村になってしまっていました。都で
はなくなった。けどそこに住んでる人たちにとってはもうそういう安定した生活が
ある。そこに今度、バビロニアが滅亡したときに——滅亡した国の都にいる人たちは
生活ができないわけです——「お前たちはユダヤ人ならユダヤに行け」みたいなその
当時の新しい支配者の都合ですね、それによって送り返されていく。バビロンで生活
が安定している人は帰っていかないわけです。だから、困窮している者たちを中心
に帰っていくっていう、それが元々いるエルサレムの人たちにとって「ああ、待ちに
待った捕囚の人たちが帰って来る喜びの時なんだ」っていうふうな人間的な解釈には
ならないわけです。「おいおい、この地に何十年か前にいた人たちの子孫が帰って来
るみたいなのは、ちょっと厄介なことになるなあ」っていう、そういうふうな反応で
す。

わたしたちの日本社会は似たようなことを経験したんです。1990年代に、かつ
て数十年前に国を離れた人たちの子孫が日本に帰って来るっていう、南米に行った人
たちの二世、三世——日系人と呼ばれる人たちは、当時は労働力不足の日本において
日本側が「どうぞ来てください」って言ったわけですけども、「ああ、日本を離れた人
たちの子孫が帰って来る」って言って社会は喜んで受け入れたのでしょうか。そういう
慰めの時っていうふうな解釈だったのでしょうか。違いますね。安く使うことができる
労働力で、日系人ならば日本人とおんなじメンタリティーだから大丈夫だろうと思っ

ていたら、二世、三世になれば言葉も現地の言葉だし、生活様式、考え方も日本社会が期待していたような“日本人”ではなかった。ということで、結局は自分たちよりも低く見るとか、安い賃金で働かせる人、あるいは厄介を持ち込んで来る人っていうような扱いを今でも受けてます。そういうようなものの見方が人間だけのものの見方になります。

捕囚が終わったときのイスラエルのエルサレムの人々が違う考え方だったとは言えないですね。しかし預言者は「あの帰って来る人たちは神の民の家族なんだ。神様が先頭に立って、羊を導くように、羊飼いのように神様が連れて来る人たちなんです。だから、今は厄介事が起こるのではなくて、神の民にとって慰めの時なんです」っていうことを一所懸命伝えようとしているということになるわけです。それが信仰によるものの見方とすることができるようでしょう。

わたしたちも、年々歳々、主をお迎えするっていうクリスマスのお祝いをして、絶えず救い主と出会い直し信仰を新たにするわけですけども、その救い主は、わたしたちが期待しているのは、救い主だけがやって来て、そして自分が願っていることを叶えてくれるっていう、人間の目で見ての救い主ではないだろうかと振り返る必要があると思います。その救い主は、このイザヤの預言の時代と同じように、誰かを連れて来ます。その誰かを信仰の目で見なければ恵みの時、慰めの時というふうに見えないかもしれない、そういう人たちを伴って救い主は絶えず到来すると言ってもいいんじゃないかと思います。

わたしたちがほんとの意味で救い主に出会うには、信仰の目をいただき、そして自分にとって都合が良いか悪いかということで判断するものの見方、それを改めなければならぬ。「山は低くし、谷は埋め」って預言者が言っている、洗礼者ヨハネも言っているのは、そういう他者を見下して止まないわたしたちの高慢の山や、他者を軽蔑する、下に置く、そういう谷、そういうものを信仰によって正していただくことを通して、ほんとの意味で救い主に出会うことができるのではないかなと思います。

わたしたちが、今、クリスマス、救い主の到来をお祝いする準備をしている期間に当たって、それぞれの中でイエス様が、救い主が連れて来るように、わたしたちが出会い直すように神様が願ってられる出来事や人は誰であろうかということを、改めてそれぞれ思い起こしてみましょ。信仰の恵みを通して神様のものの見方を少しでもいただける、そういう回心の恵みを願いながら、この待降節第2主日のごミサをお捧げしましょ。